

# 斜方向軒瓦の基礎的研究

清野孝之

- I. はじめに
- II. 各地の斜方向軒瓦とその特徴
- III. 斜方向軒瓦の使用方法
- IV. おわりに

**要旨** 本稿では、東アジアのいくつかの地域に認められる、瓦当部が丸・平瓦部に斜位に取り付く瓦（本稿では「斜方向軒瓦」と呼称）について分析をおこなった。まず、それぞれの地域の事例について、形状、文様などの特徴をあきらかにし、その分布について検討した。斜方向軒瓦は、統一新羅時代の慶州地域において軒丸瓦の出土例が数多く知られるほか、渤海、高句麗、ウイグル、日本に類例が存在し、唐にも存在した可能性がある。このうち日本の事例は時期がかなり下がり、形状や文様の有無も異なるため、系譜が異なるものと考えられる。それ以外の事例については、6～8世紀における東アジアの都城、宮殿などから出土しており、何らかの関係が推定されることを指摘した。

次に、斜方向軒瓦の使用方法について、これまで指摘されてきた諸説を紹介しながら検討した。①谷瓦説は、日本の谷瓦を参考に、屋根の入隅の谷どい部分に瓦当面向けて葺いたとする説である。②軒隅付近軒瓦説は、軒反りの強い屋根の軒隅付近に使用されたとする説である。③掛瓦説は、中国後漢代の建築明器の屋根表現を参考に、屋根の流れに対して斜めに掛瓦として葺いたとする説である。本稿では、③掛瓦説の蓋然性をもっとも高いものと考えたが、これらの説はいずれも一長一短があり、良好な資料を分析するなどして今後も引き続き検討が必要である。

キーワード 斜方向軒瓦 統一新羅 渤海 高句麗 ウイグル 使用方法 建築明器

## I. はじめに

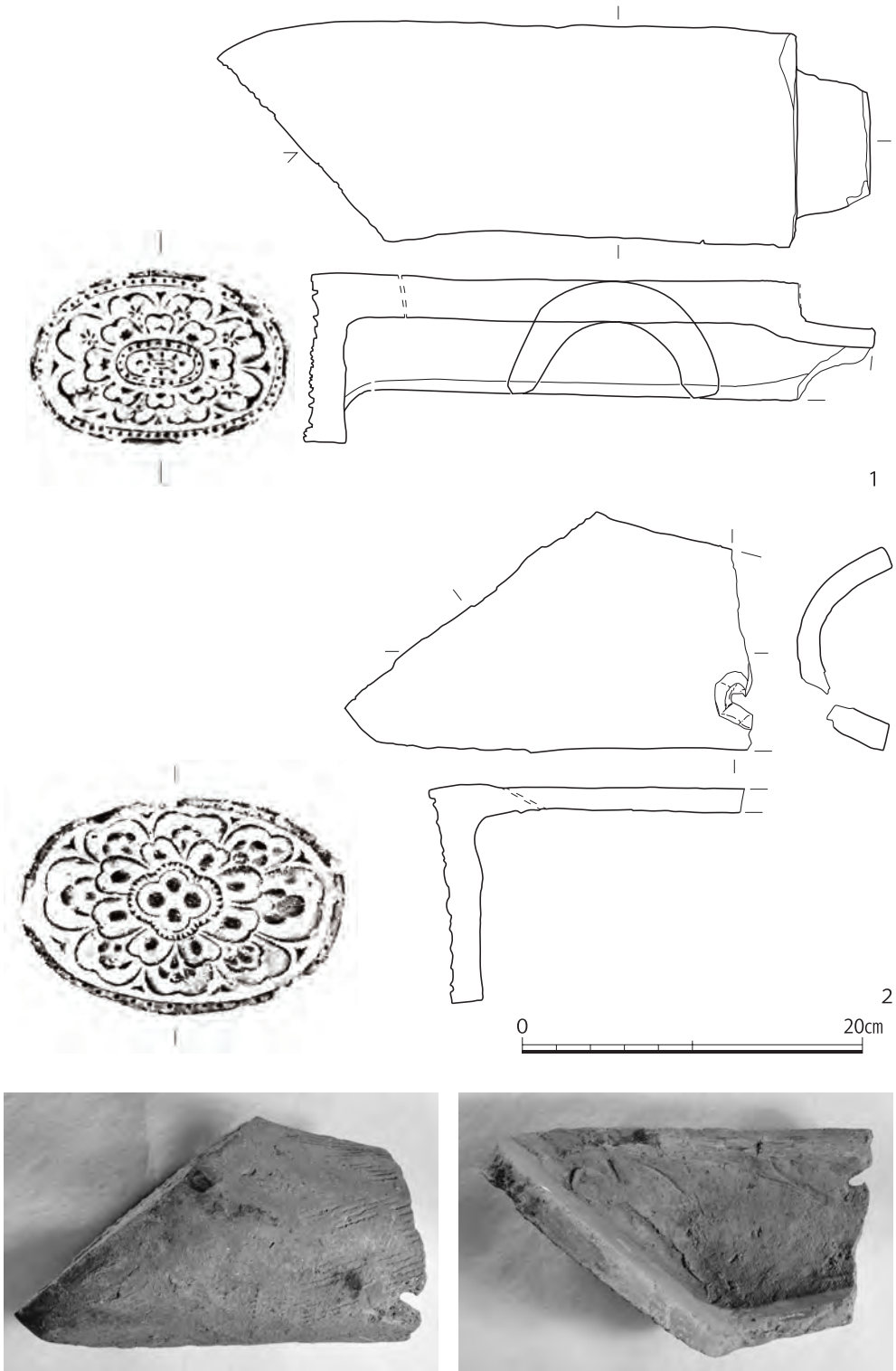
2016～2020年度の日韓共同研究において、日本の瓦研究チームは3回訪韓し、慶州地域や扶余地域の瓦を調査した<sup>1</sup>。うち慶州地域では、国立慶州文化財研究所、国立慶州博物館が所蔵する東宮・月池（雁鴨池）、皇龍寺、四天王寺、芬皇寺、金丈里瓦窯などから出土した特殊な形状の道具瓦などの調査をおこなった。本稿では、このうち瓦当部が斜めに取り付く瓦を検討する。通常の軒瓦は、瓦当部が丸瓦部ないし平瓦部の主軸方向に対して垂直、約90°の角度で取り付くが、本稿で取り上げるのは、瓦当部がそれらの主軸方向に対して斜位に取り付くものである。以下、本稿では瓦当部の角度を表現する場合、通常の軒瓦に比べ瓦当部がどれだけ斜めに振っているのかを示すため、通常の軒瓦の瓦当部方向（丸瓦部ないし平瓦部の主軸に対する垂直方向）に対する角度を指すこととする。なお、角度については報告書などに記載がほとんどなく、実物を調査した慶州出土のいくつかの事例および日本民藝館所蔵の明器を除き、多くは報告書などに掲載の図・写真から読み取った参考値である。

この種の瓦は東アジアのいくつかの地域に認められるが、韓国の慶州地域で多くの事例が知られており、韓国では一般的に「楕円瓦当」などと称されている。しかし、高正龍は、瓦当部が楕円形ではなく円形をなすものもあることを指摘し、「斜方向丸瓦当」と呼ぶことを提案している<sup>2</sup>。この種の瓦のもっとも重要な要素は、瓦当部が斜めに取り付く点にあるので、高正龍の名称のほうが適していると考えるが、丸瓦当という名称は日本では一般的でない。一方、本稿の後半で検討するように、これらは軒先以外の場所に葺かれた可能性が考えられるため、軒瓦と呼ぶことにも問題がある。しかし、これらの形状や特徴を理解する上では、軒瓦と比較しつつ、軒瓦の各部名称を用いて説明することがもっとも簡便かつイメージしやすい。そこで、この種の瓦の使用方法が確定するまでの便宜上の仮称として、軒瓦以外の用途も十分に考慮した上で、本稿においては「斜方向軒丸瓦」、「斜方向軒平瓦」と呼称し、両者をあわせて「斜方向軒瓦」と総称することとする。

## II. 各地の斜方向軒瓦とその特徴

### 1. 韓国慶州地域の斜方向軒瓦

斜方向軒丸瓦 まず、数多くの事例が知られている韓国慶州地域の斜方向軒丸瓦について、その形状の特徴を列記する（第1図）。なお、以下の記載は、日本の瓦研究チームが日韓共同研究において調査を実施した東宮・月池、皇龍寺、四天王寺、芬皇寺、金丈里瓦窯などの出土瓦の調査所見を中心としている。高正龍は、斜方向軒丸瓦のなかに雁鴨池の創建瓦（679年）をアレンジしたものがあることを指摘しており<sup>3</sup>、統一新羅時代でも早い段



第1図 東宮・月池出土斜方向軒丸瓦 1:4 (写真を除く)

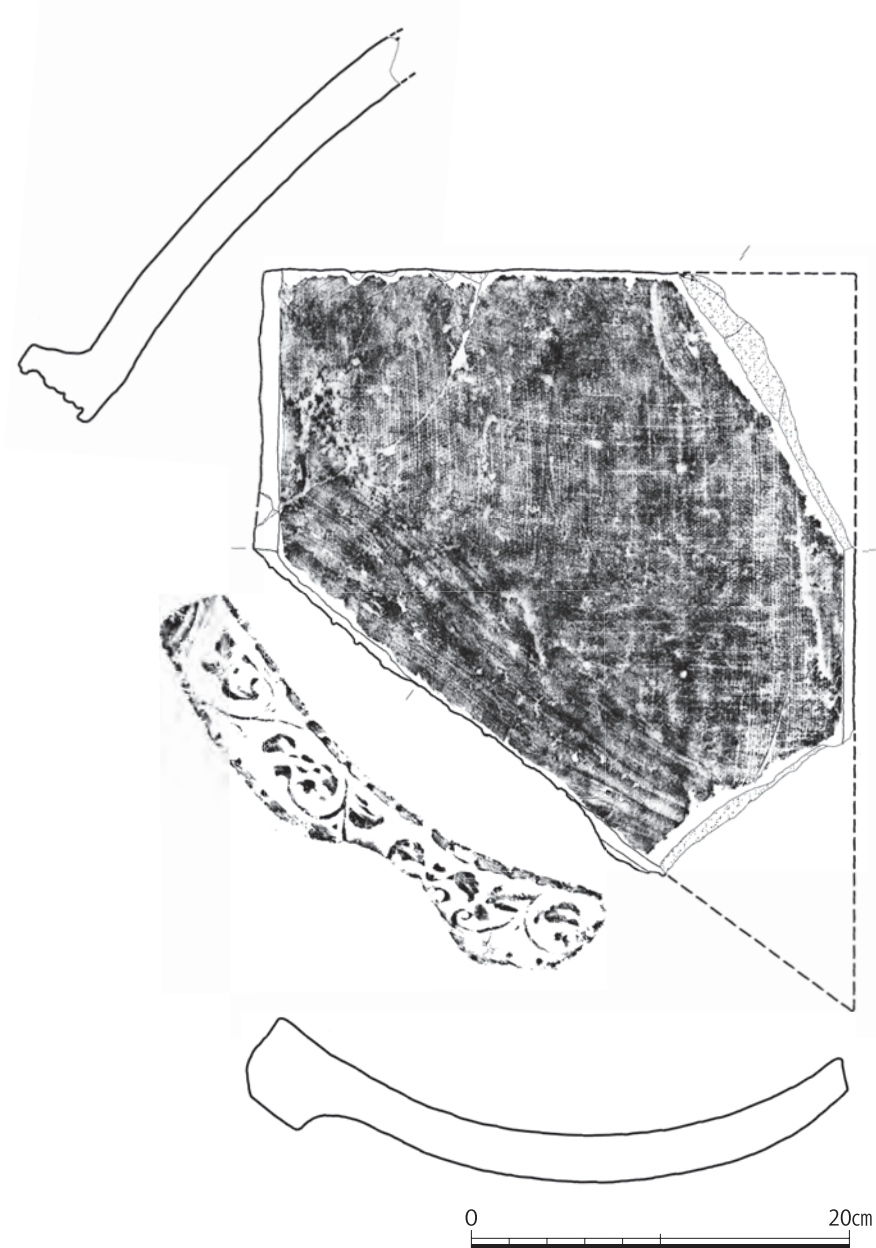
階から存在していたと考えられる。

- ・丸瓦部の先端に、丸瓦部主軸に対して左または右斜位に瓦当部が取り付く。丸瓦部主軸に対する瓦当部の角度が大きく40°以上のものが多いが、角度が30°程度ないしそれ以下で若干斜めになる程度のものもある。
- ・同じ遺跡から出土する斜方向軒丸瓦は、丸瓦部と瓦当部の角度に大きな違いがない場合が多い。ただし、通常の軒丸瓦に紛れ込み見落とされている事例が多い可能性も考えられるため、今後、良好な出土資料による検討が必要である。
- ・同じ遺跡から出土する類似した文様の斜方向軒丸瓦でも、丸瓦部主軸に対して瓦当部が右斜めに取り付くものと左斜めに取り付くものがあり、対になって使用された可能性がある。
- ・瓦当部の形状は、丸瓦部主軸に対する瓦当部の角度が大き（約40°以上）ものはいずれも楕円形をなす。報告書や図録類にみえる類例も同様に楕円形をなすものが多い。しかし、井内功、高正龍が指摘している通り、慶州地域には瓦当部がほぼ円形のものがある<sup>4</sup>。

高正龍は、瓦当部の形状と瓦当面の角度の関係について、斜め方向に大きく丸瓦を截断すると、必然的に楕円形にしなければ瓦当面をふさぐことができず、後述する渤海東京城の資料など角度が小さいものは、周縁部分を少し補足すれば円形の瓦当部をそのまま使用できるとし、瓦当部の形状の違いは丸瓦部との接合角度にあると指摘している<sup>5</sup>。確かに、慶州地域や後述する各地の斜方向軒丸瓦のうち、瓦当部が円形に近いものは丸瓦部主軸に対する瓦当部の角度が小さい傾向があり、高正龍の指摘は当を得ているものと考えられる。

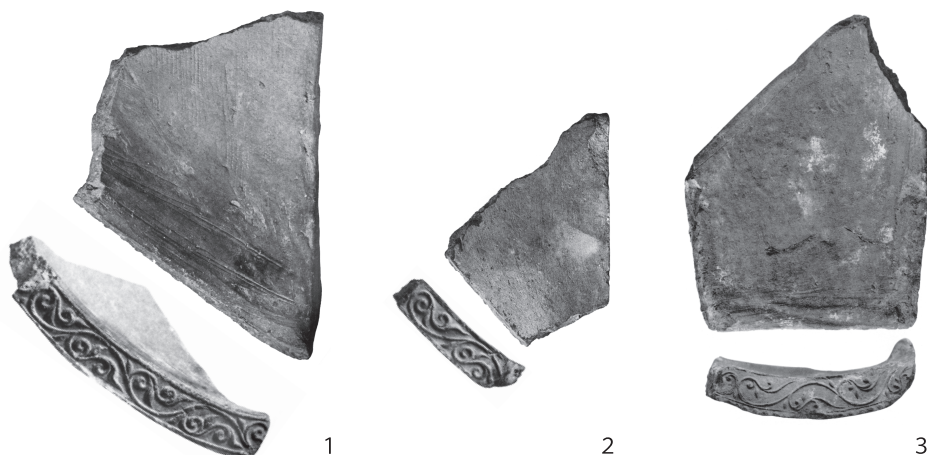
- ・丸瓦部に瓦当部を斜めに接合するため、接合部付近は丸瓦部の形状が歪むものがあるが、それらの点を除けば、丸瓦部の形状、直径などは通常の軒丸瓦の丸瓦部と大きく変わらない。したがって、通常の丸瓦部の端部を斜めに成形し、さらに粘土を継ぎ足すなどして、瓦当部を斜めに接合したものと考えられる。
- ・慶州の東宮・月池出土の斜方向軒丸瓦には、丸瓦部中軸線から約45°振れた位置に、焼成後に直径0.6~0.8 cmの釘穴を穿孔しているものがある（第1図2）。

斜方向軒平瓦 次に、韓国慶州地域で出土している斜方向軒平瓦について、その形状の特徴を列記する。確実な出土事例は芬皇寺出土の1点のみである（第2図）。『朝鮮瓦磚図譜V』に慶州市内出土として所収された軒平瓦について、井内功は平瓦部側縁を斜めに切断した隅軒平瓦とする<sup>6</sup>（第3図1）が、写真から判断する限り、平瓦部凹面の布目の方向は平瓦部側縁にほぼ沿い、瓦当面に対してはかなり大きく（45°程度）斜位をなす。通常の軒平瓦や隅軒平瓦では、凹面の布目が平瓦部の主軸方向に対して若干傾くことはあっても、ここまで布目が大きく傾く事例はほとんど認められないことから、本例は平瓦部側縁



第2図 芬皇寺出土斜方向軒平瓦 1:4

と凹面の布目が平瓦部の主軸に沿い、瓦当部がそれらに対して斜位をなす斜方向軒平瓦である可能性が高いものと考えられる。また、これと文様が類似し、瓦当部の角度に近い同書収録の東宮・月池出土例も同種のものである可能性がある（第3図2）。斜方向軒平瓦は、実際は小片化して見分けがつきにくく、通常の軒平瓦のなかに埋もれているものが相当数あると推定される。その形状の特徴は以下の通りである。



第3図 慶州出土斜方向軒平瓦（1・2）、隅軒平瓦（3）

1：慶州市内出土、2：東宮・月池出土、3：臨海殿出土

- ・平瓦部の一方の端部に、平瓦部主軸方向に対して斜位に瓦当部が作られ、平瓦部主軸に対して瓦当部が斜め30～40°程度をなす。
- ・平瓦部凹面に残る布目は、平瓦部主軸方向、平瓦部側縁にほぼ沿うものが多く、瓦当部に対しては大きく斜位をなす。通常の平瓦の一方の端部を斜めに成形し、瓦当部としたものと考えられる。
- ・芬皇寺出土例の平瓦部は、広端と狭端の幅の差が明確でなく、その幅は通常の軒平瓦と大きく変わらない。
- ・芬皇寺出土例の顎部形状は段顎で、平瓦部の厚さより瓦当面の上下幅が広い。一方、斜方向軒瓦の可能性が高い慶州市内、東宮・月池出土例は、写真から判断する限り、平瓦部の厚さと瓦当面の上下幅の差がほとんどない直線顎とみられる。
- ・文様は通常の軒平瓦と大きな違いはない。

以上の通り、斜方向軒丸瓦と斜方向軒平瓦は、瓦当面が丸瓦部や平瓦部の主軸方向から斜位に取り付く点を最大の特徴としており、それ以外の特徴は通常の軒丸瓦・軒平瓦に近い。斜方向軒平瓦の出土事例が少ないことから明確ではないが、芬皇寺（おそらく東宮・月池も）では斜方向軒丸瓦と斜方向軒平瓦がともに出土しており、両者は組んで使用された可能性が考えられる。

隅軒平瓦との違い 井内功が慶州市内出土の事例を隅軒平瓦と判断したように、斜方向軒平瓦と隅軒平瓦の形状は類似点が多い。隅軒平瓦は、その名が示す通り屋根の軒先の隅部に葺かれる軒平瓦である。その形状の特徴は、瓦当部に対向する平瓦部の端部が平瓦部の主軸方向に対して斜位をなす点にある（日本では一般的に平瓦部広端側が瓦当部となるため、これに対向するのは平瓦部狭端であるが、韓国では両端部の幅がほぼ同じものや、狭

端側に瓦当部を付けたと考えられる事例もあるので、ここでは端部と表現する。第3図3)。平瓦部端部が右斜めのものと左斜めのものがあり、通常一对で使用されるが、対をなす隅軒平瓦の端部を接合し、一体で作るタイプ（いわゆる廻り隅軒平瓦）もある。

隅軒平瓦は平瓦部の端部側が平瓦部の主軸に対し斜位をなし、瓦当部は通常の軒平瓦と同じであるが、斜方向軒平瓦は、瓦当部側が平瓦部の主軸方向に対して斜位をなす。両者は、屋根に葺かれた際の水仕舞い（水流方向）、ひいては屋根で使われる場所、用途が異なるものと考えられる。

小片の場合、側縁およびこれと斜位をなす端部または瓦当部が残存しないことも多いため、斜方向軒平瓦と隅軒平瓦の区別がつきにくい。特に側縁が残らない場合、見分けが困難となるが、平瓦部の曲面の具合や凹面の布目の向きなどを丹念に観察すれば、瓦当部ないし端部が平瓦部の主軸方向に対して斜位となっているかどうか、ある程度判断可能と考えられる。

## 2. 各地の斜方向軒瓦

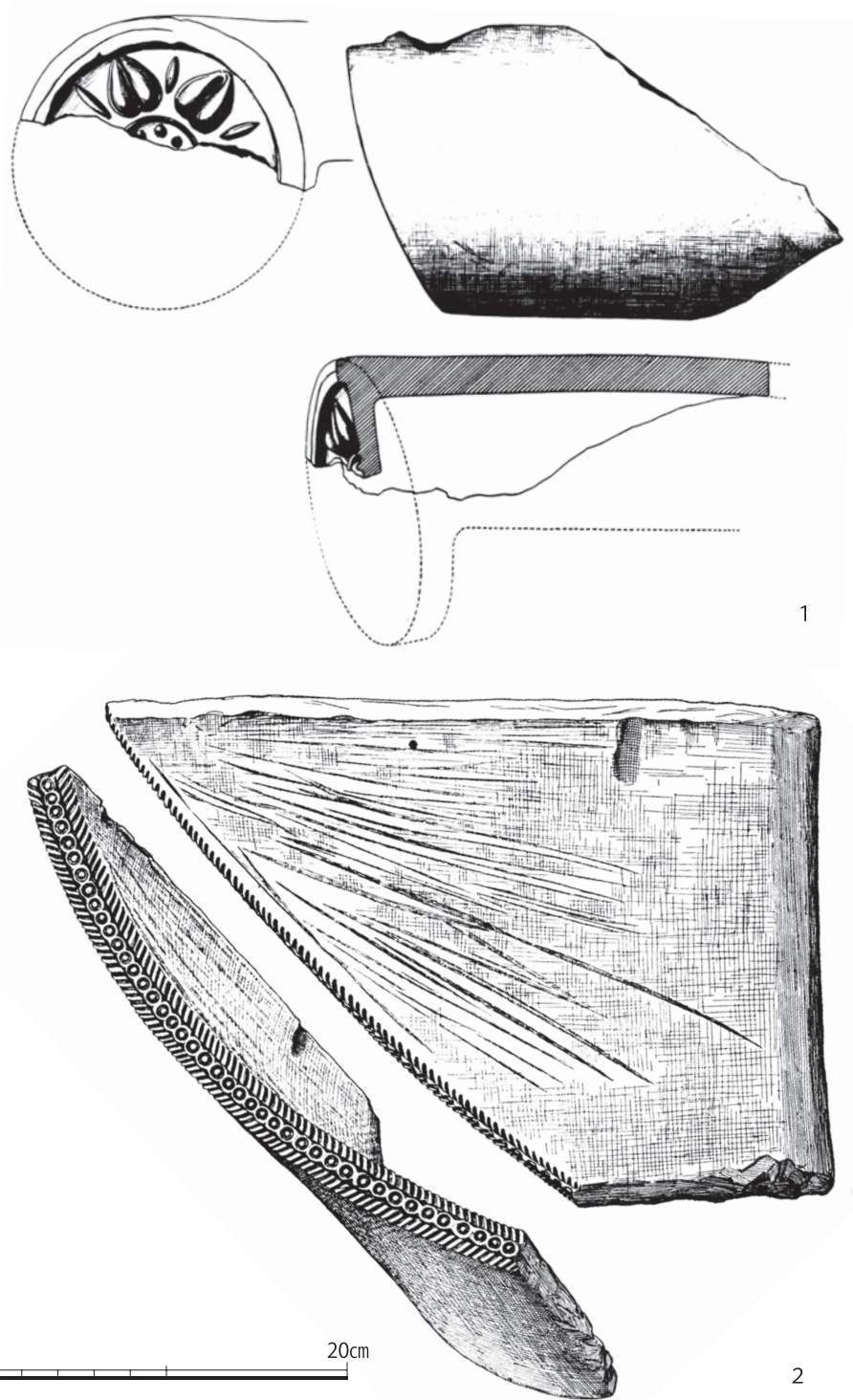
渤海の斜方向軒瓦 渤海の都城のうち、中国黒竜江省に所在し、755年から渤海の滅亡に至るまでのほとんどの期間に都が置かれた上京龍泉府に比定される上京城（東京城）、中国吉林省に所在し、755年に上京龍泉府に遷都するまで都が置かれた中京顕徳府に比定される西古城から、斜方向軒瓦がセットで出土しており、同じ宮殿遺構（西古城一号宮殿東側廊廡、西古城二号宮殿東側配殿）から双方が出土した事例も認められる<sup>7</sup>（第4～7図）。

斜方向軒丸瓦は高正龍が指摘した通り、丸瓦部主軸に対して瓦当部が若干斜めに取り付く程度であり、その角度は20°以下のものが多く、角度がやや大きいものでも30°は超えない（第4図1、第5図1・2、第6図）。瓦当部の形状も高正龍の指摘通りでほぼ円形をなし、文様も通常の軒丸瓦と変わらない。瓦当部の直径、丸瓦部の直径は、通常の軒丸瓦や丸瓦と大差がなく、丸瓦部の長さはやや短いものが多い。

瓦当文様は通常の軒丸瓦と共通するものがほとんどで、上京城や西古城ではハート型を呈する蓮弁に杏仁形や十字形の間弁を配する六弁蓮華文で、中房は大型の半球形の蓮子を中心とし、周囲に小粒の蓮子や圈線をめぐらせるものが出土している。

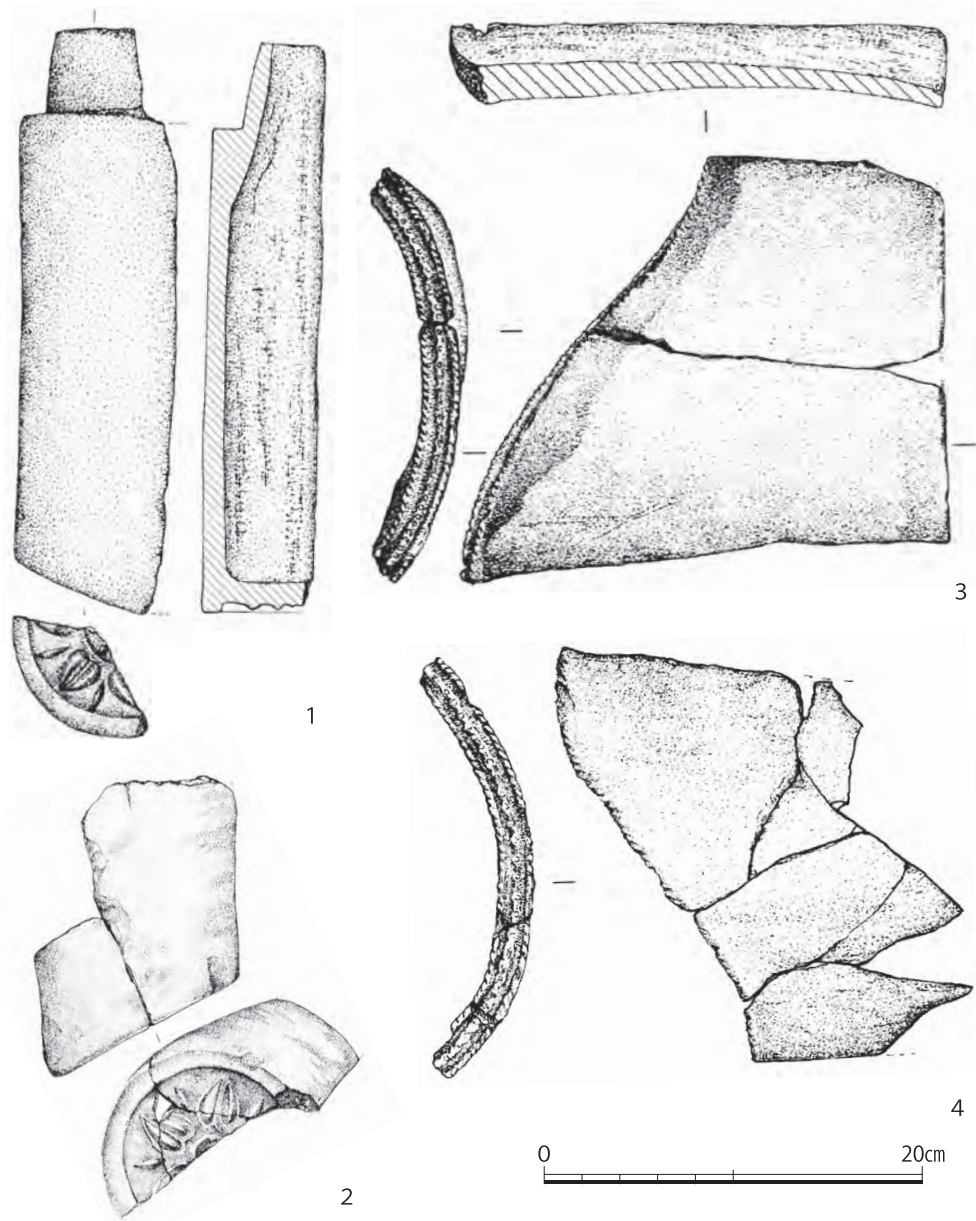
斜方向軒平瓦は、平瓦部主軸に対して瓦当部がなす角度がかなり大きく、40°程度からなかには50°近いものもある（第4図2、第5図3・4、第7図）。瓦当部の上下幅は狭く、顎部は平瓦部の厚さとはほぼ変わらない直線顎である。平瓦部の長さは通常の軒平瓦の平瓦部より若干短い。報告書によれば、平瓦部の幅は通常の軒平瓦、平瓦とはほぼ同じか若干狭い。これは平瓦部の広端幅と狭端幅が異なり、最大幅となる広端側を斜めに切り落とすためであろう。

瓦当文様は通常の軒平瓦と共通し、3段構成の上下の文様帯に細かい斜め刻み目を付け、



第4図 上京城（東京城）出土斜方向軒瓦 1 : 4

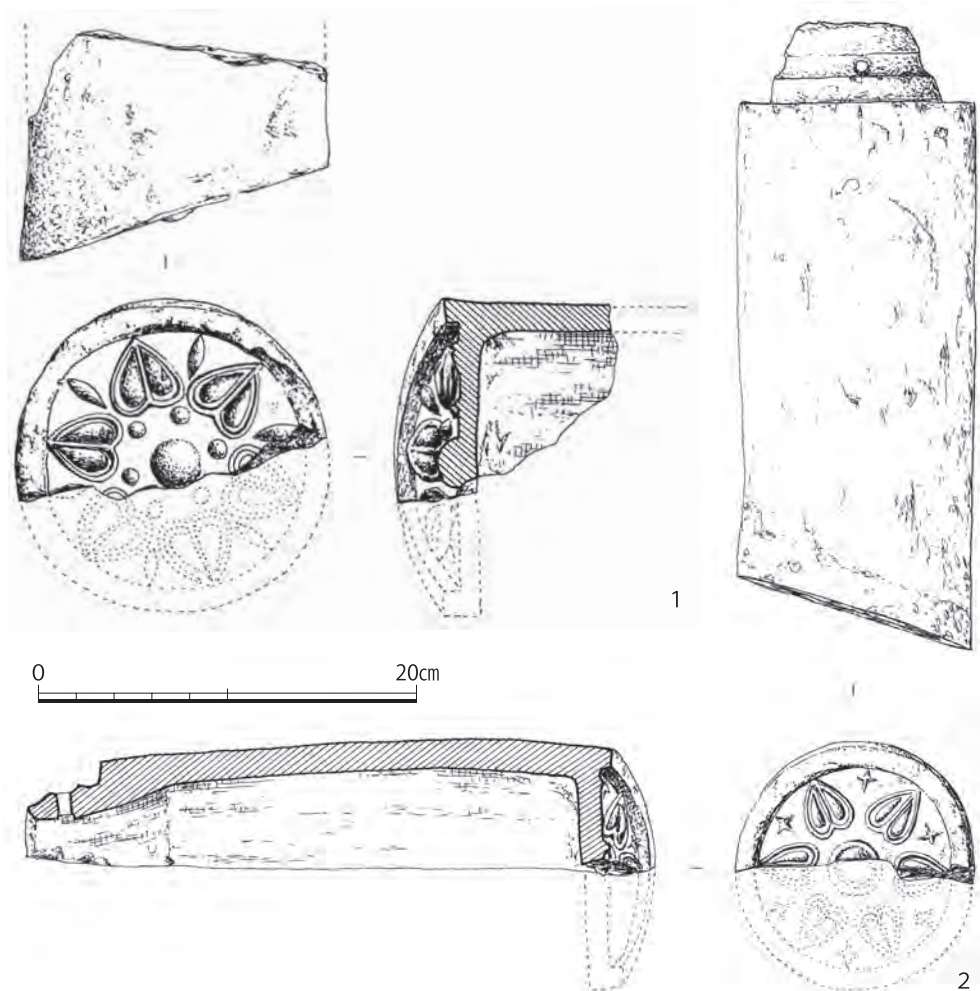




第5図 上京城出土斜方向軒瓦 1 : 4

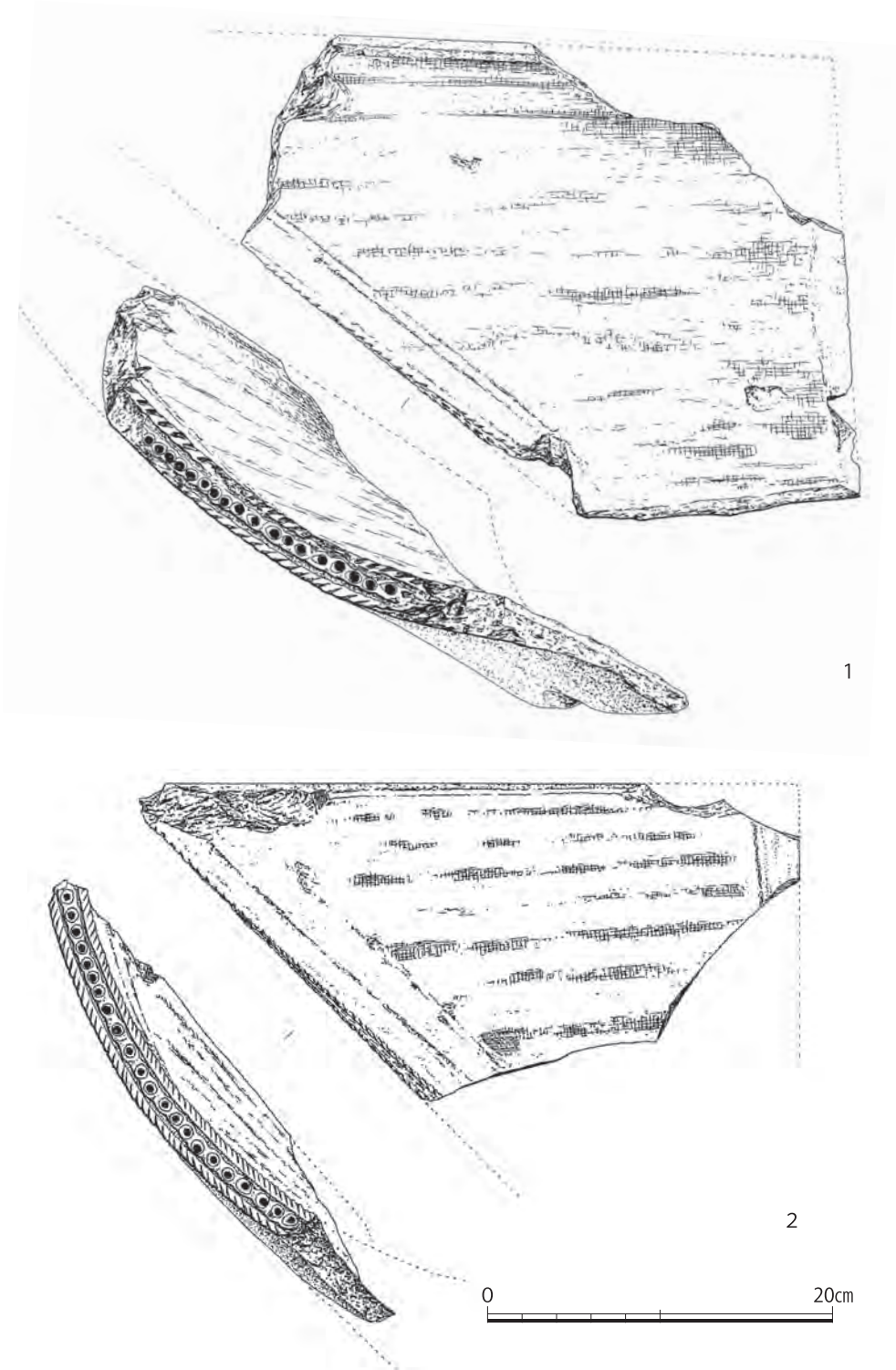
中央の文様帯に小型の円形刺突文を連続して配するものが多い。施釉したものもみられる。

斜方向軒丸瓦と斜方向軒平瓦は、丸瓦部・平瓦部と瓦当部の傾きの角度に差が認められるものの、瓦当部が斜方向を向くという特徴的な形状が共通することや、同じ遺構より出土していることから、組み合って使用された可能性が考えられる。

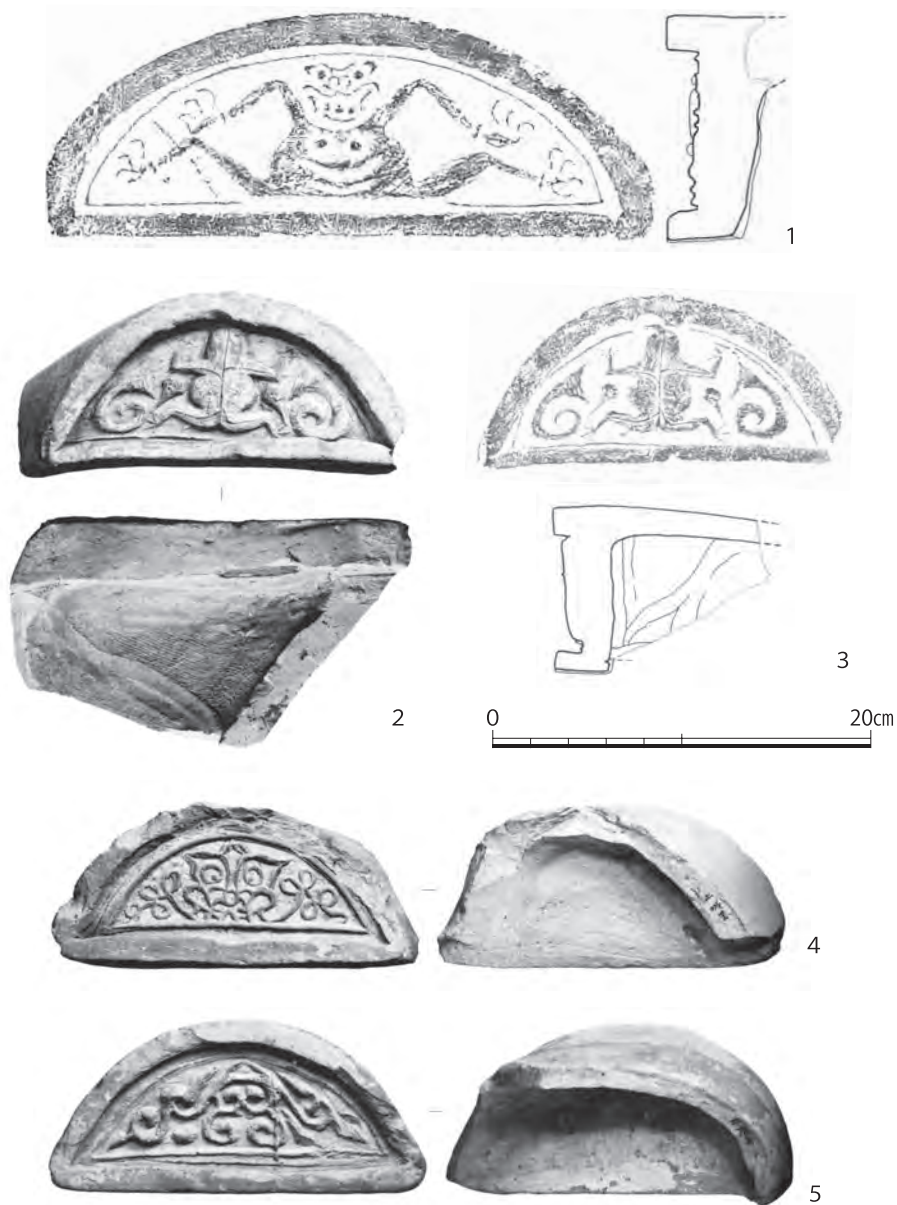


第6図 西古城出土斜方向軒丸瓦 1 : 4

高句麗の斜方向半瓦当軒瓦 戦前に平壤城内から出土した半瓦当軒瓦を対象に、井内潔が詳細な検討をおこなっており、瓦当文様から「全般的に平壤時代後半期における特徴が看取される」ため、この種の半瓦当軒瓦を6世紀中頃以降に出現したものとする<sup>8</sup>（第8図）。高句麗の事例は後述する通り年代観が重要となるため、千田剛道や朱洪奎による高句麗の軒丸瓦に関する近年の研究を参考に、若干の検討をくわえる<sup>9</sup>。瓦当文様は獸身文とされるもの（第8図1）や蛙文（第8図2・3）のほか、突線のみで構成された平板な獸面文と崩れた蟠虺文を組み合わせるもの（第8図4）や、忍冬文の影響を思わせる火炎状の表現をもつものがあり（第8図5、第9図）、単線の外圏線をめぐらす（朱洪奎の圏線Cに該当か）。瓦当裏面の接合部には、櫛状工具による細かい刻み目（朱洪奎によるカキヤブリC）の痕跡を残すものがある。こうした特徴は、軒丸瓦においては千田剛道の編



第7図 西古城出土斜方向軒平瓦 1 : 4



第8図 平壤出土の斜方向半瓦当軒瓦1 1:4 (写真除く)

年による高句麗瓦7期（6世紀後半～668年）、朱洪奎による高句麗軒丸瓦編年Ⅳ段階（6世紀第3四半期～高句麗滅亡）に位置づけられるものと考えられるが、若干古くなりそうな要素をもつものもある<sup>10</sup>。ここでは年代観のめやすとして、高句麗の事例の存続期間に6世紀後半から668年が含まれる可能性が高いことを確認しておく。

次にその形状について、梅原末治は「外形はやや弧形に作られ、また瓦当面が筒瓦に対して着裝の特別な反りや曲りを持った類が少くない」<sup>11</sup>とし、井内潔は「著しく扁平に造

られ、しかも往々にして瓦当面对して筒瓦が左右いずれか斜めに取り付けられている」とした<sup>12</sup>。半楕円形を呈する瓦当部が、丸瓦部（と仮にしておく）の主軸に対して斜位に取り付けられ、その角度は30°程度とやや小さめである。井内潔によれば、瓦当部の横幅が30 cm程度の大型のものと、20 cm程度の小型のものがあるとする。



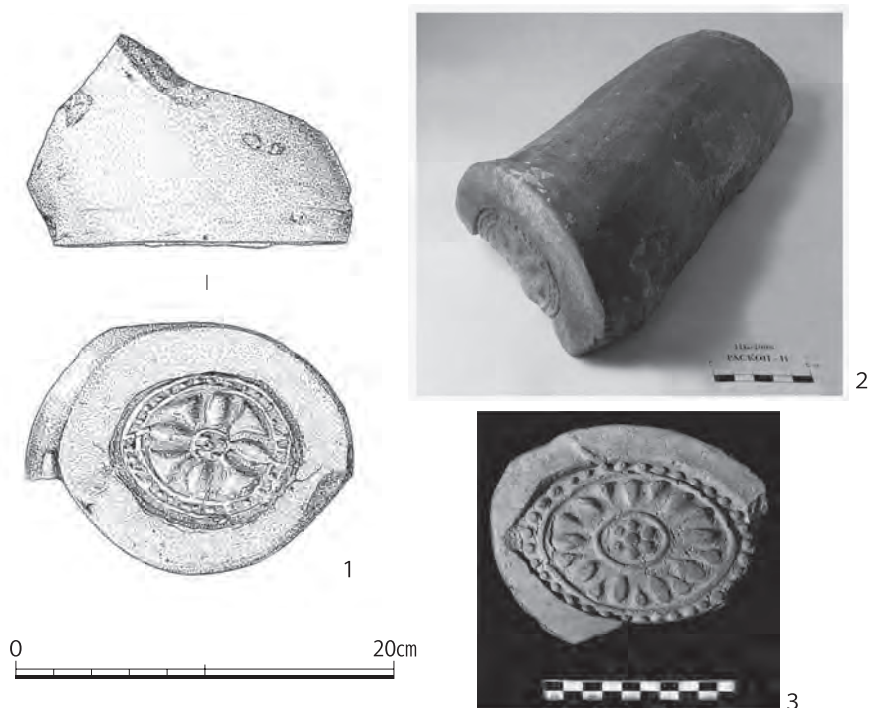
第9図 平壤付近出土の斜方向半瓦当軒瓦2

これらの半瓦当軒瓦と同じく、戦前に平壤城で採集されたそのほかの瓦の幅・直径を、報告書・図録などに掲載の図や写真などから復元すると、通常の丸瓦部広端の幅は18~20 cm程度、軒丸瓦の瓦当直径は16~18 cm程度であり、半瓦当軒瓦のうち瓦当部が小型のものとは近いが、大型のものとはかなり幅（直径）が異なることになる。そこで平瓦に注目すると、広端幅は30~34 cm程度であり、大型のものは平瓦の幅とよくあう。実際、写真でみる限り、平壤付近出土の半瓦当軒瓦の瓦当裏面上端に、かなり曲率が緩い平瓦風の瓦が接合されたと考えられる事例がある（第9図）。この事例自体の大きさは不明であるが、これと文様が極めてよく似るものは幅30 cmを超える<sup>13</sup>。高句麗の斜方向半瓦当軒瓦のうち、大型のものは瓦当裏面に平瓦部が取り付けく可能性が考えられる<sup>14</sup>。

一方、小型の斜方向半瓦当軒瓦は丸瓦広端や通常の軒丸瓦の直径より若干横幅が広いが、これは瓦当部が斜めに取り付くためであろう。小型のものの瓦当部の上下幅は、ちょうど丸瓦広端幅や通常の軒丸瓦の直径の半分程度のものが多い。このことから高句麗の半瓦当軒瓦のうち、小型のものは瓦当裏面に丸瓦部が取り付けくと考えても矛盾がない。

**ウイグルの斜方向軒丸瓦** ウイグル帝国の宮殿や都城遺跡から、斜方向軒丸瓦が出土している（第10図）。モンゴル高原に所在するオールド・バリク遺跡は、ウイグル帝国第3代可汗の牟羽可汗が8世紀後半に建設した中国式の都城とされ、ロシア連邦トゥヴァ共和国の湖上の島に所在するボル・バジン遺跡は、同じく8世紀後半に牟羽可汗が建設した中国風の宮殿とされる遺跡である。これらの遺跡のいずれにおいても、唐の影響を受けたと考えられる瓦が出土しているが、そのなかに少量、瓦当部および文様が楕円形を呈する軒丸瓦が出土している。このうちボル・バジン遺跡出土のものは、丸瓦部の一部が残存しており、丸瓦部主軸に対して瓦当面が若干斜め（25°程度）に取り付いていることが指摘されている<sup>15</sup>。

瓦当文様はかなり崩れているが、唐の蓮華文軒丸瓦の影響をうかがわせる。杏仁形の単弁四弁蓮華文に三角形の大きな間弁を配するものや、同じく杏仁形の単弁九弁蓮華文に三



第10図 ウィグル出土斜方向軒丸瓦 1 : 4 (写真を除く)

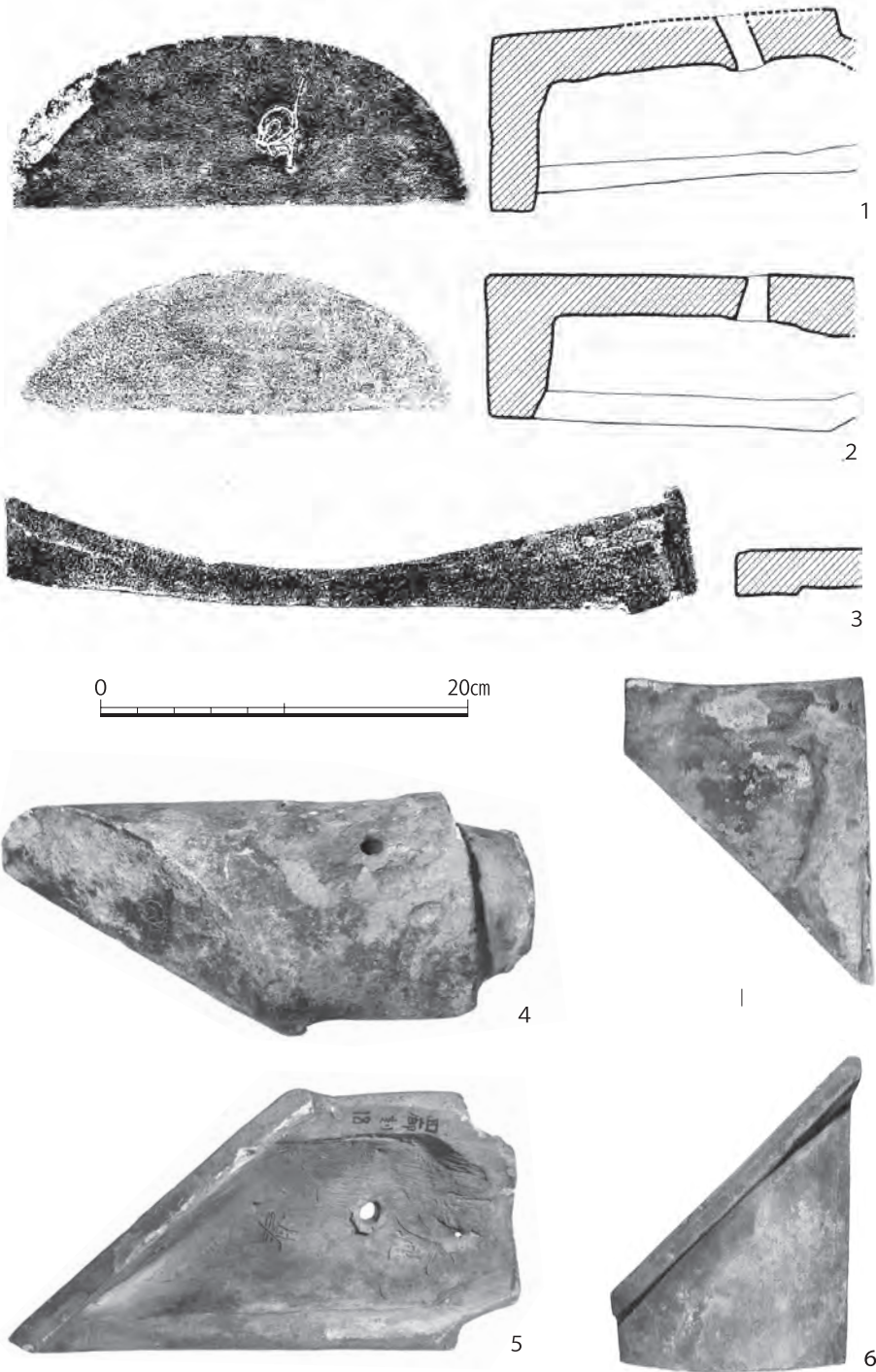
1・2 : ポル・バジン遺跡出土、3 : オルド・バリク遺跡出土

角形ないし水滴形の間弁を配するものがあり、中房には小粒の1 + 4ないし1 + 6顆の蓮子を置き、外区には珠文を多数配し、中房周囲や外区に圏線をめぐらせる。

日本の斜方向軒瓦 日本では中世以降現代に至るまで、半楕円形の瓦当部を丸瓦部主軸に対して斜位に取り付ける軒丸瓦(第11図1・2・4・5)、瓦当部の下辺が水平をなし、瓦当部を平瓦部主軸に対して斜位に取り付ける軒平瓦がみられる<sup>16</sup>(第11図3・6)。これらの瓦当部は、丸瓦部・平瓦部の主軸方向に対して45°程度と急な角度で取り付く。丸瓦部の直径、平瓦部の幅ともに通常の軒瓦の丸瓦部・平瓦部や丸・平瓦と大差なく、長さは短い。瓦当文様は軒丸瓦、軒平瓦のいずれも無文で、瓦当部を文様で飾る事例は存在しない。

これらとほぼ同じ瓦が現存する古建築にも使用されており、その使用方法は瓦当部を屋根根の入隅の谷どい部に向けて使用する谷瓦である。この種の瓦の使用方法を論ずることが本稿の目的の一つなので、章を改めて詳しく説明する。

唐の状況 日本を除くと、統一新羅、渤海、高句麗、ウィグル帝国など、6～8世紀頃に存在した東アジアのいくつかの国家の都城、宮殿、寺院などで出土例が知られることになる。そのため北朝、隋、唐にも斜方向軒瓦が存在した可能性が想定されるが、丸・平瓦部の主軸方向に対して瓦当部が斜位に取り付く軒瓦は、これまで公表された事例のなかには



第11図 法隆寺の谷瓦 1 : 4 (写真を除く)

1・4・5 : 谷巴瓦 法隆寺 199 R、2 : 谷巴瓦 法隆寺 199 S、3・6 : 谷唐草瓦 法隆寺 399 R



第12図 唐長安城出土軒丸瓦 1 : 4

見出せない。ただし、唐長安城出土として、瓦当部が明確に楕円形を呈する事例が報告され、「楕円形瓦当極少見」と解説されている<sup>17</sup>（第12図）。本例は最大径が19.2 cm で、瓦当部の形状だけでなく文様自体が楕円形を呈する。瓦当文様は通常の軒丸瓦と共通する単弁八弁蓮華文で、間弁は「Y」ないし「T」字形、中房は大型の1顆のみで、外区に珠文帯をめぐる。瓦当裏面や丸瓦部の取り付け状況は不明である<sup>18</sup>。本例の詳細はあ

きらかにしがたいが、唐にも斜方向軒瓦が存在する可能性を指摘しておきたい。

### 3. 小結 - 東アジアにおける斜方向軒瓦 -

本章では、東アジアのいくつかの地域にみられる斜方向軒瓦の事例を紹介したが、このうち日本の事例は時期が大きく下がることや、形状がやや異なること、無文であることなどからみて、ほかの事例とは系譜があきらかに異なるものと考えられる。これを除くと、いずれも6～8世紀のもので、当時存在した東アジアのいくつかの国家の中枢をなす都城、宮殿、寺院に認められることとなり、それぞれの地域において重要な施設の屋根を飾ったものと考えられる。その特徴的な形状の共通性も考慮すると、これらは何らかの強い関係性をもって存在したと推定することが可能であろう。

その関係性の一端をうかがい知るためには、高句麗の事例の年代が一つのカギとなる。これが6世紀代に遡るのであれば、高句麗から統一新羅、渤海、ウイグル帝国（そしておそらくは唐）へと伝わった可能性が考えられる<sup>19</sup>。668年の高句麗滅亡後、高句麗遺民が唐や新羅へ多数流入し、30年後には高句麗の故地で渤海を建てるが、こうした動向と関わることも想定される。ウイグル帝国へは唐経由で伝わったのであろう。一方、高句麗の事例が7世紀代まで下がる場合も同様に、高句麗から各地へ伝わった可能性は残るが、唐（またはそれより古い中国王朝）からその周辺国家へと伝わったことも考えられる。高句麗の事例の年代観の詳細や唐の具体的な状況が不明であるため、これ以上の分析は困難であるが、いずれにせよ、当時の東アジア諸国の情勢や国家間の関係を物語る貴重な資料の一つである可能性を指摘しておきたい。

## III. 斜方向軒瓦の使用方法

斜方向軒瓦の使用方法については、これまでにいくつかの説が提唱されてきた。そのうち主要なものを紹介しつつ検討する。



## 1. 谷瓦説

井内功、井内潔の説 井内功は日韓の隅軒平瓦を論じるなかで、隅軒平瓦とされてきた渤海東京城出土の斜方向軒平瓦（第4図2）について、「おそらく谷瓦とみてよい」とした<sup>20</sup>。しかし、これを谷瓦とすることについて詳しい説明はない。井内潔は、斜方向軒丸瓦を日本の谷瓦を参考に谷どい部に用いる「谷巴」瓦とし、井内功は「谷鏡瓦」と表記してこれを踏襲した<sup>21</sup>（第13図）。井内潔は、日本と高句麗の斜方向軒丸瓦の瓦当部がいずれも半楕円形をなすことから、まず高句麗の事例を「谷巴」瓦と考え、次にこの場所に瓦当部が楕円形をなすものを葺くことも可能として、統一新羅の斜方向軒丸瓦についても同様のものとした。谷瓦の形状は、前章で既に説明した通り斜方向軒丸瓦と共通点があり、瓦当面を谷どい部に向けて使用する。また、韓国でもこの説を支持する見解があることを高正龍が紹介している<sup>22</sup>。

谷瓦説の問題点 井内潔の説に対し、高正龍は日本の谷瓦が古代まで遡らないことにくわえ、井内功自身も指摘するように、慶州地域ではこれと組み合わせるはずの軒平瓦が見当たらないとし、谷瓦説に疑問を呈する<sup>23</sup>。年代観については高正龍の指摘通りであるが、軒平瓦については慶州地域や渤海では斜方向軒平瓦が出土しており、組み合わせる可能性もあることから、この点の批判は当たらないものと考えられる。

この説の問題点はほかにある。既に清水信行が指摘している通り、この部分に用いる瓦には文様が不要と考えられることである<sup>24</sup>。瓦当部を谷どい部に向けて用いる谷瓦は、瓦当面の文様はほとんどみえないか、極めてみえにくいはずであり、特に軒平瓦にあっては、文様が見えるように葺くことは困難である。事実、日本の谷瓦はいずれも無文である。ところが、日本以外の斜方向軒瓦には、例外なく文様が施され、渤海の事例では施釉された事例もある。外からよくみえる部分には徹底的に装飾を施し、みえない部分は仕上げの調整を省略する可能性があることが、中国や朝鮮半島における当時の瓦の一般的な在り方であり、瓦当部に例外なく文様が施されている斜方向軒瓦は、瓦当部を外からよくみえる方向に向けて葺いたと考えるのが妥当であろう。この点は、斜方向軒瓦の谷瓦説にとって大きな弱点と考える。

## 2. 軒隅付近軒瓦説

藤島亥治郎の説 藤島亥治郎は、慶州周辺で出土する斜方向軒丸瓦について、軒反りの強い屋根の軒隅付近に使用する軒丸瓦とする説を提唱している<sup>25</sup>。軒反りが強い屋根では、軒隅に近づくに従い軒先が反り上がるとともに、軒先が徐々に前に出る。この傾きにあわ



第13図 法隆寺西院伽藍回廊入隅の谷どい部

せ軒隅まで瓦当面をそろえるための軒丸瓦ではないか、と解する説である。斜方向軒平瓦もこれにあわせて葺くことができると考えられるので、以下、軒隅付近軒瓦説と仮称する。斜方向軒丸瓦の形状、および朝鮮半島などの古建築にみられる屋根形状の特徴、それにあわせた瓦の葺き方の推定から導き出された藤島亥治郎の説には、一定の説得力が感じられる。

報告書などの記載 報告書などの説明では、隅軒平瓦と考えているのか、軒隅付近軒瓦と考えているのか判別がつきにくいものがある。慶州芬皇寺出土の斜方向軒平瓦は、前章で紹介した通り隅軒平瓦と形状が異なるのであるが、報告書では軒の角の軒平瓦と表記されている<sup>26</sup>。隅軒平瓦に比定したものと考えられるが、その根拠の詳しい記載がない。

渤海の上京城（東京城）出土の斜方向軒瓦の使用方法については、東方考古学会による同遺跡の発掘調査報告書に記載がある。まず斜方向軒平瓦（「歪んだ三角形を葺すもの」）については、「軒隅に使用されたと思はれる」とし、斜方向軒丸瓦（軒丸瓦の瓦当部が「斜に附いてるもの」）については、「屋根の隅または反りのある個所に使はれたものであらう」<sup>27</sup>とする。これ以上の具体的な説明や根拠などの記載はないが、斜方向軒平瓦を隅軒平瓦に比定したのに対し、斜方向軒丸瓦は軒隅付近軒瓦に比定したものと考えられる<sup>28</sup>。

同じく上京城（東京城）出土の斜方向軒平瓦の使用方法について、清水信行は隅軒平瓦との違いを明示した上で、「反りの強い屋根の降り棟の先端部のすぐ脇に置かれたもの」としている<sup>29</sup>。清水信行のいう「降り棟」を隅降棟（隅棟）の意と解すれば、隅棟先端の軒先（軒隅）付近で軒反りにあわせて使用したという軒隅付近軒瓦説となる。

軒隅付近軒瓦説の問題点 軒隅付近軒瓦説に対して高正龍は、谷軒丸瓦説と同様に、これと組み合う軒平瓦が新羅では出土していないことを指摘するが<sup>30</sup>、これが当たらないと考えられることはすでに説明した通りである。

この説の問題点はいくつかある。まず、隅に近づくに従い、徐々に出や傾きが変化する軒先にあわせて瓦当面を揃えるためには、瓦当面と丸瓦部の取り付け角度を徐々に変化させる必要があり、角度が異なる数種類の斜方向軒瓦が必要となると考えられる。しかし、一定量の出土がある慶州地域の斜方向軒丸瓦でも、瓦当がほぼ円形で丸瓦部主軸に対して若干斜位（30°以下）になるものや、瓦当が楕円形で丸瓦部に40°以上の角度で取り付けくものは認められるものの、これらが同じ屋根に葺かれたとわかる状況ではなく、これらがあわせて葺かれたとしても軒隅付近全体をカバーしきれるかどうかは不明である。慶州地域以外については、瓦当面の取り付け角度のバラエティはほとんど認めがたい。

また、このような葺き方をした場合、軒瓦については説明がつくように思われるのであるが、それに続く地葺きの丸・平瓦の葺き方が問題となる。広端部や狭端部などが斜めに

なるなど、斜方向軒瓦にあう特殊な形状の丸・平瓦の事例はこれまでに報告されていない。軒隅付近軒瓦説に蓋然性をもたせるためには、これにあわせて使用される丸・平瓦の葺き方についても検討が必要であろう。

以上の状況からみて、現時点では軒隅付近軒瓦説が成り立つ余地も考慮しつつ、今後、同じ遺跡から出土した同範、同系統の文様をもつ斜方向軒瓦や、丸・平瓦を含む良好な資料を対象とし、さらに詳細な分析・検討をくわえる必要があるだろう。

### 3. 掛瓦説

**井内潔の検討** 井内潔は、高句麗の斜方向半瓦当軒瓦について、瓦当部と丸瓦部の取り付け角度が斜位になることから、掛瓦として使用された可能性も指摘している<sup>31</sup>。そして掛瓦と考える根拠の一つとして、中国の「家型明器」に掛瓦を斜めに葺く事例がみられることを挙げる。しかし井内潔は、この説では高句麗の事例の瓦当部が半楕円形（半瓦当）となる理由が説明できないため、最終的にはこれを「谷巴」瓦とした。

しかし、斜方向軒瓦を屋根の流れに対して斜位に葺く掛瓦に比定する説は、以下説明する通り、これまでの説のなかではもっとも蓋然性が高いと考える。ここでは、中国の明器の観察を通して掛瓦説を検討する。

**建築明器にみえる掛瓦の葺き方** 井内潔が指摘した通り、中国の明器には、掛瓦を屋根の流れに対して斜位に葺く事例が認められる。中国では、人物や動物、様々な器物や建築物などを模した陶製や木製の俑、明器を墓中に納める習慣があり、建物を模した明器は前漢代には存在しそれ以降も盛んに作られた。その種類は家屋だけでなく楼閣、倉、家畜小屋など様々であるため、以下、本稿では建築物を模した明器を建築明器と総称する。建築明器の屋根瓦表現については、後漢代に特に精巧なものが多く、軒丸瓦の瓦当文様を表したり、丸・平瓦を線刻により1枚ずつ表現したりするものがみられる。

井内潔が指摘した掛瓦を斜位に葺く事例は、切妻造りの屋根を象った建築明器に認められる。管見による限りでは、いずれも後漢代の事例である。建物の種類は倉、家畜小屋、臼小屋のほか、単層や重層の家屋とみられるものもある。掛瓦自体は入母屋造りの屋根にも用いられるが、入母屋造りの建築明器で掛瓦を斜位に葺く表現は、管見による限り確認できない。

掛瓦を斜位に葺く建築明器の一例として、日本民藝館所蔵の建築明器を詳しく説明する(第14図)。この明器は、日本民藝館を創設した柳宗悦が戦後に国内で購入したもので、出土地などの詳細は不明とのことである<sup>32</sup>。総高49.5 cmの単層切妻造りの高床建物で、幅33.0 cmの平入り側の壁の中央に間口幅18.2 cm、高さ19.7 cmの入口を開き、ここに可動式の大きな両開き扉を設け、扉の両脇に上下幅8.2 cmの門錠を取り付ける。写真では門錠に棒状品を差し込んで扉を固定しているが、この棒状品は後補とのことである。扉のあ

る面以外の三面の壁には窓やそのほかの表現がみられない。これらの構造からみて、倉を模したものと考えられる。

屋根は軒丸瓦を表現するが、丸・平瓦を1点ずつ表現することはせず、丸瓦筋を幅2.0 cm程度の細長い粘土紐で表現する。軒平瓦・平瓦の表現は省略されている。軒丸瓦の瓦当は円形で、直径は丸瓦筋の幅より大きい2.5~2.7 cm程度、中央に小円文を配する。

大棟端は、軒丸瓦風の瓦の瓦当部を3点組み合わせることで棟端を止める。大棟も地葺きの丸瓦筋と同様に瓦を個々に表現せず幅2.0 cm程度の細長い粘土紐としており、大棟最上部の雁振瓦に丸瓦を用いた表現と考えられるが、大棟中央には長さ3.0 cm程度にわたり粘土を貼り付け1段高くした部分がある。これは、大棟の両端から順に葺いてきた丸瓦列の玉縁部が大棟中央でぶつかる部分に、さらに丸瓦を重ねてふさいだ表現と考えられる。

さて、肝心の掛瓦であるが、切妻屋根の妻端部、破風の上の螭羽部分に軒丸瓦状の掛瓦の瓦当部と丸瓦部を表現する。通常の掛瓦は屋根の流れに垂直に葺かれるが、この明器の掛瓦は屋根の流れに対して斜めに葺かれ、通常の掛瓦の葺き方と比べ約30°斜位をなす。瓦当は円形で直径2.0~2.2 cm、丸瓦部の幅は1.7 cm程度であり、軒丸瓦および地葺きの丸瓦筋より一回り小さい。瓦当部と丸瓦部の取り付け角度は、瓦当部が丸瓦部の主軸に対してほぼ垂直に取り付くが、ごくわずかに(10°程度)斜位をなす部分もある。

本例以外の建築明器で、掛瓦を斜位に葺く事例についても、瓦当文様や大棟端を精巧に表すもの、線刻で平瓦を1点ずつ表すもの、降棟をほかの丸瓦筋より一段高く表現するものなど、屋根瓦の部分はかなり精巧、入念に作られていることから、平瓦などに一部省略が認められるものの、表現された部分については実際の屋根をかなり忠実に模している可能性が高いものと判断される。したがって、掛瓦を屋根の流れに対して斜位に葺く方法が、少なくとも後漢代においては、建物の屋根瓦を葺く手法として実在した可能性が高いと考えられる。

さらに本稿で検討してきた斜方向軒瓦の特徴と比較すると、同一遺跡から出土する斜方向軒丸瓦の瓦当部と丸瓦部の角度にバラエティが少ない点、瓦当部の取り付け方向が左右で対になる点についても掛瓦説であれば問題にならない。くわえて、東宮・月池出土の斜方向軒丸瓦にみられる釘穴の位置についても説明可能である。先述の通り、釘穴の位置は丸瓦部の中軸から約45°振った位置に穿たれている。屋根に対して斜めに傾く掛瓦の丸瓦部に対し、垂直に近い向きに釘を打とうとした結果、丸瓦部中軸から振った位置に釘穴を穿つことになったと考えることができよう。このように、斜方向軒丸瓦を屋根の流れに対して斜位に葺かれた掛瓦とする掛瓦説は、ほかの説と比べ蓋然性が高いものと考えられる。

**掛瓦説の問題点** 掛瓦説にもいくつかの問題点がある。まず、渤海や慶州で出土している斜方向軒平瓦を斜方向軒丸瓦とセットで破風の上の螭羽部分に葺けるかどうかについては、



第14図 日本民藝館所蔵の建築明器

使用可能と考えられるものの、建築明器には平瓦部分の表現が省略されているため詳細が不明である。掛瓦説をとった場合の螻羽などの屋根の納め方については、さらに具体的な検討が必要である。

また、掛瓦説では高句麗の事例の瓦当部が半楕円形（半瓦当）をなす理由が説明できないことは、井内潔が指摘した通りである。しかし、瓦当部と丸・平瓦部が斜位に取り付くという特異な形状の瓦が、東アジアのいくつかの地域で近い時期に広く用いられたことに對し、高句麗のみ用途が異なっていたとするほうが不自然であろう。瓦当部の形状については依然、問題が残ったままではあるが、掛瓦として使用すること自体は可能と考えられる。ただし、高句麗の大型の斜方向半瓦当軒瓦も同じく掛瓦と解する場合、同様に葺くことができるのかどうか検討が必要となる。

さらに、掛瓦説の根拠となっている建築明器は後漢代のものであり、その後もこうした屋根瓦の葺き方が存続していたかは不明である。また、少なくとも後漢代にはこうした掛瓦の葺き方が実在したと考えられるが、この頃まで遡る斜方向軒瓦は確認されていない。この点も掛瓦説にとって問題となる。これには、後漢代以降、切妻屋根を表現した明器や石棺蓋、絵画資料などが少なくなり、さらに瓦の葺き方まで検討可能なものとなると、かなり事例に限られることが関係していると考えられる<sup>33</sup>。これも良好な資料の増加を俟つしかない状況といえる。

#### 4. そのほか

このほか、濱田耕作や梅原末治は慶州地域の斜方向軒丸瓦について、「下り棟の側端に使用したと認められる」としている（該当箇所は梅原末治が主に執筆したとされる部分であり、梅原末治によるものと考えられる<sup>34</sup>）。この説について、井内潔は「降り棟や隅棟を形成する堤瓦 鬮斗瓦ともいう の上層に葺かれた」という意味と解し、高正龍は「棟込瓦のようなものを想定していると思われる」としている<sup>35</sup>。梅原末治らの説は、これ以上の詳しい説明がないため具体性に乏しく、これ以上の検討は困難である<sup>36</sup>。

## IV. おわりに

本稿では、特異な形状をもつ斜方向軒瓦について、東アジア各地の事例を概観した。また、それらの時期や出土する遺跡に注目し、統一新羅、渤海、高句麗、ウイグル帝国、そしておそらくは唐を含む6～8世紀に存在した東アジアのいくつかの国家において、何らかの関係性をもって用いられた瓦である可能性を指摘した。くわえて、それらが出土する遺跡は、それぞれの国家の中樞をなす都城、宮殿、寺院などであるため、重要な施設の屋根を飾ったものと考えた。しかし、同時期に中国や朝鮮半島からの強い影響を受け、都城、宮都、寺院を造営した日本には、これらが導入されなかった点は注目すべきことである。

その違いが何を意味するのか、さらに深く検討できる資料が増加することを期待したい。

また、その使用方法について、これまでの説を整理するとともに問題点を検討した。本稿においては、後漢代の建築明器との比較から掛瓦説が有力であると考えたが、未解明の部分や弱点もあり、一仮説の域を出ない状況である。現時点ではあきらかにしがたい部分がかかり多く、基礎的な整理に終始した感が否めないが、今後も良好な資料の調査を継続しつつ、東アジアにおける特殊な瓦の分布の意味や使用方法について、検討を深めたい。

謝 辞 国立慶州文化財研究所および国立慶州博物館での調査では、韓国の瓦研究チームの文玉賢氏、張誠允氏、閔庚仙氏、崔文禎氏、李仁淑氏、国立慶州文化財研究所の金東河氏、梁滄鉉氏、国立慶州博物館の金有植氏、金赫中氏をはじめとする多くの方々にお世話になった。日本民藝館所蔵建築明器の調査に際しては、日本民藝館の白土慎太郎氏、杉山享二氏に大変お世話になった。また、建築明器の写真撮影には栗山雅夫の手を煩わせた。末筆ながら記して謝意を表したい。

#### 註

- 1 日本の瓦研究チームは筆者のほか、今井晃樹、林正憲、岩戸晶子、石田由紀子、清野陽一、道上祥武の7名である。本稿は、チーム全員による検討成果を筆者がまとめたものである。
- 2 高正龍「新羅古瓦についての覚書」『研究紀要』第6号、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2000年。
- 3 高正龍「新羅古瓦についての覚書」（前掲註2）。
- 4 井内 功『朝鮮瓦磚図譜Ⅶ 総説』井内古文化研究室、1981年、高正龍「新羅古瓦についての覚書」（前掲註2）。
- 5 高正龍「新羅古瓦についての覚書」（前掲註2）、p.61。
- 6 井内 功「古代の隅字瓦について－いわゆる法隆寺遺品を中心として－」『井内古文化研究室報』7、井内古文化研究室、1971年。
- 7 原田淑人・駒井和愛ほか『東京城 渤海国上京龍泉府址の発掘調査』東方考古学叢刊甲種第5冊、東亜考古学会、1939年。吉林省文物考古研究所・延辺朝鮮族自治州文化局・延辺朝鮮族自治州博物館・和龍市博物館『西古城』2000～2005年度渤海国中京顯徳府故址田野考古報告、文物出版社、2007年。黒竜江省文物考古研究所『渤海上京城』1998～2007年度考古発掘調査報告、文物出版社、2009年。
- 8 井内 潔「高句麗の半瓦当屋瓦」『井内古文化研究室報』15、井内古文化研究室、1976年、p.268。
- 9 千田剛道『高句麗都城の考古学的研究』北九州中国書店、2015年。朱洪奎「高句麗軒丸瓦の変遷に関する基礎的検討－紋様および製作技法における諸特徴の分析から－」『考古学雑誌』102-2、2020年。
- 10 諸岡榮治編『楽浪及高句麗古瓦図譜』便利堂、1935年、図版43所載の(94)、朝鮮総督府『高句麗時代之遺蹟』図版上冊、古蹟調査特別報告第5冊、大塚工藝社、1929年、56頁所載の287・288。
- 11 梅原末治『朝鮮古文化綜鑑』第4巻、株式会社養徳社、1966年、p.36。このほか、梅原末治は「或る一種の特別な反りと曲がりを持ったもので、其用途が今にはつきりされてゐない」とも表現している（諸岡榮治編『楽浪及高句麗古瓦図譜』（前掲註10））。
- 12 井内 潔「高句麗の半瓦当屋瓦」（前掲註8）、p.259。
- 13 井内 潔「高句麗の半瓦当屋瓦」（前掲註8）、pp.206-261所載の「3、平壤出土」の資料。

- 14 高句麗の大型の半瓦当軒瓦の瓦当裏面に平瓦部が取り付く場合、瓦当部の形状や平瓦部との角度が異なるが、慶州地域で多くの出土例が知られる平瓦部凹面側の端部に顎部を付けた形状の軒平瓦（韓国では樸椀瓦当、棟飾り平瓦などと呼ばれる瓦）ともやや類似することになり注目される。
- 15 Arden-Wong, L.A., Arzhantseva, I.A. and O.N. Inevatkina (2015) "Reflecting on the Rooftops of the Eastern Uighur Khaganate: A Preliminary Study of Uighur Roof Tiles", Sino-Platonic Papers, No.258, pp.1-72.
- 16 法隆寺におけるこの種の軒丸瓦の最古の事例として、1495～1548年（「室町後期Ⅰ」）に遡るものが報告されている（佐川正敏「室町時代の瓦」法隆寺昭和資材帳編集委員会1992『法隆寺の至宝 瓦』－昭和資材帳－第15巻、株式会社小学館、1992年）。
- 17 趙力光『中国古代瓦当図典』文物出版社、1998年、p.760。
- 18 統一新羅には韓国で「望瓦」と称され、鳥衾瓦としての使用が推定されている特殊な瓦があり、そのなかには瓦当部が楕円形をなす事例がある。第12図は、この類の瓦である可能性も残る。
- 19 高句麗の事例については、瓦当部が半楕円形であることや、大型品が存在し、平瓦部が取り付く可能性があるなど、ほかの事例と比べやや異なる点が多い。これは、ほかの事例より時期がやや古くなる可能性があることも関わることかもしれない。
- 20 井内 功「古代の隅字瓦について－いわゆる法隆寺遺品を中心として－」（前掲註6）、p.118。
- 21 井内 潔「高句麗の半瓦当屋瓦」（前掲註8）、pp.270－272。井内 功『朝鮮瓦磚図譜Ⅶ 総説』（前掲註4）、p.65。
- 22 金誠龜が感恩寺の報告書（金誠龜『感恩寺発掘調査報告書』国立慶州文化財研究所、慶州市、1997年）において、この説を支持したことを紹介している。高正龍「新羅古瓦についての覚書」（前掲註2）。しかし金誠龜は註31に示すように、のちに自説を一部修正したものと考えられる。
- 23 高正龍「新羅古瓦についての覚書」（前掲註2）、井内 功『朝鮮瓦磚図譜Ⅶ 総説』（前掲註4）。
- 24 清水信行「渤海上京龍泉府出土の平瓦・丸瓦」田村晃一編『東アジアの都城と渤海』東洋文庫論叢第64、財団法人東洋文庫近代中国研究班、2005年。
- 25 藤島亥治郎「朝鮮の出土古瓦に就いて」『綜合古瓦研究 夢殿』第18冊、1938年。なお、藤島亥治郎の原文は以下の通り。「瓦の葺き筋と茅負の軸線とは軒隅に行くに従ひ漸次直角から斜角度を増して行く。したがって、瓦当は当然斜に置かれねばならないが一般には普通の軒瓦を以て葺いてしまふ。所が、新羅時代においては特に軒先の瓦当部を軒隅に到る迄揃へるが為に故意に此の工夫に出たものであらうと思ふ。」（p.60）。
- 26 国立慶州文化財研究所『芬皇寺発掘調査報告書Ⅱ』学術研究叢書92、2015年。
- 27 原田淑人・駒井和愛ほか『東京城 渤海国上京龍泉府址の発掘調査』（前掲註7）、p.46・48。
- 28 東方考古学会の報告書には、藤島亥治郎の論文が参考文献として挙げられていないため確定はしがないのであるが、刊行年が極めて近いことからみて、原田淑人や駒井和愛が藤島の説を踏えて記載した可能性も考えられる。
- 29 清水信行「渤海上京龍泉府跡の瓦再考」『扶桑』田村晃一先生喜寿記念論文集（青山考古第25・26号合併号）、青山考古学会田村晃一先生喜寿記念論文集刊行会、2009年、p.413。
- 30 高正龍「新羅古瓦についての覚書」（前掲註2）。
- 31 井内 潔「高句麗の半瓦当屋瓦」（前掲註8）。なお、金誠龜は統一新羅の斜方向軒丸瓦を掛瓦、または屋根の隅付近の地垂木用の垂木先瓦とし、高句麗の斜方向半瓦当軒瓦もこれと類似する場所で使用された可能性を示した（金誠龜「新羅기와의 成立과 그 變遷」『新羅瓦磚』国立慶州博物館、2000年、p.431、金誠龜「瓦の種類と使用位置」森 郁夫・金誠龜『日韓の瓦』帝塚山大学出版会、2008年、p.138）。詳しい説明を欠くものの、前者は掛瓦説であり、井内潔の説を支持したものと考えられる。後



者は、屋根の隅付近で放射状に配される扇垂木の先に、垂木先瓦の瓦当面を揃えて並べるための工夫と解することができ、軒隅付近軒瓦説とも一部通じるところを感じさせる。ただし後者の場合、斜方向軒平瓦の葺き方については説明が見つからないことになる。

- 32 日本民藝館学芸員の白土慎太郎氏のご教示による。
- 33 前章で検討したように、斜方向軒瓦が高句麗から他地域にひろがったとすれば、後漢に存在した特殊な屋根の葺き方が遼東地域や楽浪郡、帯方郡などを経て高句麗に伝えられ、その葺き方に特化した特殊な瓦が製作されたと想定することも可能であろう。
- 34 濱田耕作・梅原末治『新羅古瓦の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告第13冊、刀江書院、1934年、p.23。
- 35 井内 潔「高句麗の半瓦当屋瓦」（前掲註8）、p.269。高正龍「新羅古瓦についての覚書」（前掲註2）、p.61。
- 36 梅原末治らの説を文字通り読み、降棟自体の「側端」の意と取れば、井内功や高正龍の想定通り、降棟の鬮斗瓦の上に積まれた棟込瓦のようなものを指すことになる。しかし、通常、棟込瓦には瓦当部が楕円形をなすものや、瓦当裏面の舌（丸瓦部）の主軸に対して斜位に付くものが見当たらず、斜方向軒丸瓦の特徴との共通点はほとんど認められないため、なぜ梅原末治らがこれを棟込瓦のようなものと考えたのか、理解に苦しむことになる。そこで、この表記を文字通り読むのではなく、降棟付近の屋根の側端の意と取ることが許されれば、降棟は切妻造りないし入母屋造りの屋根の破風の上、螻羽付近に位置するので、その側端に葺かれた掛瓦を指したと解する余地も残される。梅原末治らの真意をこれ以上追求することはできないが、一つの可能性として提示しておきたい。

#### 挿図出典

- 第1図：図は、岩戸晶子実測の図に国立慶州文化財研究所『慶州東宮斗 月池Ⅱ』学術研究叢書87、2014年所収の図を一部合成し、筆者製図。写真は清野陽一撮影。拓本は同書から転載。
- 第2図：註26文献より一部改変し転載。
- 第3図：井内古文化研究室『朝鮮瓦磚図譜Ⅴ 新羅3』、1977年より転載。
- 第4図：註7の原田淑人・駒井和愛ほか1939年文献より転載。
- 第5図：註7の黒竜江省文物考古研究所2009年文献より転載。
- 第6図：註7の吉林省文物考古研究所・延辺朝鮮族自治州文化局・延辺朝鮮族自治州博物館・和龍市博物館2007年文献より転載。
- 第7図：第6図と同じ。
- 第8図：図・拓本は井内古文化研究室『朝鮮瓦磚百粹』、1993年より転載、写真は井内 功『朝鮮瓦磚図譜Ⅱ 高句麗』井内古文化研究室、1976年より転載。
- 第9図：註11の梅原末治1966年文献より転載。
- 第10図：註15文献より転載。
- 第11図：法隆寺昭和資材帳編集委員会『法隆寺の至宝 瓦』-昭和資材帳-第15巻、株式会社小学館、1992年から転載。
- 第12図：註17文献より転載。
- 第13図：奈良文化財研究所都城発掘調査部遺構研究室撮影。
- 第14図：栗山雅夫撮影。

## 사선방향 막새의 기초적 연구

清野 孝之 (세이노 다카유키)

**요 지** 본고에서는 동아시아의 몇 지역에 분포하는 와당 부분이 수·암키와부에 사위(斜位)로 집합하는 막새[본고에서는 ‘사선방향 막새(斜方向軒瓦)’라 표기]에 대한 분석을 실시하였다. 우선 각 지역의 사례에 대해서 형태, 문양 등 특징을 명확하게 살펴보고, 분포 양상을 검토하였다. 사선방향 막새는 통일신라시대 경주 지역에서 수막새의 출토 사례가 상당히 알려져 있다. 그리고 발해, 고구려, 위구르, 일본에도 유사 사례가 있으며, 당나라에도 존재하였을 가능성이 있다. 이 중에 일본 사례는 시기가 상당히 내려가서 형태나 문양 유무도 달라서 계보가 다를 것으로 생각된다. 그 이외의 사례에 대해서는 6~8세기 동아시아의 도성, 궁전 등에서 출토되고 있으며, 어떠한 상관관계를 추정할 수 있다는 점을 지적하였다.

다음으로 사선방향 막새의 사용방법은 지금까지 지적된 세가지 설을 소개하면서 검토하였다. ① 다니가와라설(谷瓦說)은 일본의 다니가와라(谷瓦)를 참고하여, 지붕의 골 모퉁이 부위 안쪽으로 들어간 부분에 와당면을 향하게 하여 이었다는 설이다. ② 처마 모서리 부근 막새설(軒隅付近軒瓦說)은 처마 휜 현상이 강한 지붕의 처마 모서리 부근에 사용되었다는 설이다. ③ 너새설(掛瓦說)은 중국 후한시대의 건축명기(建築明器)의 지붕 표현을 참고로 한 설이다. 박공 위 날개 부분에 지붕 경사에 맞게 비스듬히 이는 너새(掛瓦)라고 해석한 것이다. 본고에서는 ③너새설(掛瓦說)의 개연성이 가장 높다고 여겨지나, 이들 설은 모두 장단점이 있기 때문에 좋은 자료를 계속해서 분석하면서 앞으로도 지속적인 검토가 필요하다.

**주제어** : 사선방향 막새(斜方向軒瓦), 통일신라, 발해, 고구려, 위구르, 사용방법, 건축명기

## Elementary Study of Diagonal Roof-end Tiles

Takayuki Seino

**Abstracts:** This paper examines the distribution and usage of “diagonal roof-end tiles” across several areas of East Asia. First, I investigate the distribution of specific forms and decorations of roof-end tiles with examples from: Korea—covering the Gyeongju area of the Unified Silla, Balhae (Bohai) and, Goguryeo (Gaogouli); China—including Uighur and potential Tang dynasty examples; and, Japan—excavated from later period city and palace sites of the 6th to 8th centuries.

Second, I examine the usage of roof-end tiles within the context of previous hypotheses: (1) The valley-tile theory states that the roof was pitched with tiles facing the valley gutters at the entrance corner of the roof, a reference to Japanese valley-tiles; (2) The eave-corner-tile theory states that these tiles were used near the eave-corner of a roof with strong eave warping; and, (3) The hanged-tile theory states that the roof was reroofed at an angle to the slope of the roof, referring to models of miniature offering buildings from Later Han Dynasty China. While each theory has its own positive and negative points, the hanging tile theory (3) is considered here to be most probable. However, further research and analysis is acknowledged.

**Keywords:** Diagonal Roof-end tiles, Unified Silla, Balhae (Bohai), Goguryeo (Gaogouli), Uighur, Usage, Offering Miniature Buildings